

30-1044 W107-3

薬学教育におけるチュートリアルを試み

○阿部 芳廣¹, 下遠野 久美子¹, 鈴木 岳之¹, 飯島 史朗¹, 藤本 和子¹, 服部 研之¹, 石川 さと子¹, 高橋 恭子¹, 松本 佳代子¹, 村上 勲¹, 小林 静子¹ (¹ 共立薬大)

【目的】問題解決型教育の方法として Small Group Learning (SGL) が有効であるといわれており、医学部では SGL を PBL (Problem Based Learning)-tutorial と銘打って、症例検討に取りいれている。薬学教育モデルコアカリキュラムの中にある「～を討議する」という態度教育を意味する SBO は、SGL 教育が適している。薬学教育に適した問題解決型のカリキュラムを構築することを目的に医療薬学系科目を学ぶ前の 2 年次に SGL を開講した。

【方法】事前準備として、東京慈恵会医科大学での PBL「症例学演習」を見学した。「SGL を考えるためのワークショップ」を名大・医・福岡敏雄氏をコーディネーターとして開催し、チューター養成とシラバス作成を行った。本年度は自由選択科目 1 単位、学生 15 名 (3 グループ) で実施した。11 コマで「サリドマイド」、「卒業生の進路を調べてみよう」、「インフルエンザ」の 3 課題について実施した。

【結果・考察】「サリドマイド」のテーマでは 3 グループそれぞれが、1) 異性体と生理活性、2) サリドマイドの作用機序、3) 医薬品としての管理・法規制、と全く別の視点で、情報収集・討議・発表した。「卒業生の進路を調べてみよう」では、卒業生の進路について統計的にデータをまとめるだけでなく、アンケート調査をしたり、「6 年制が卒業生の進路に及ぼす影響」について纏めたグループもあった。本年度はトライアルの意味もあって、自由度の高い課題であったため、多様なプロダクトが得られた。終了後の学生の反響は、やりがいがある、能動的な学習ができた、刺激になって良かったなど、好評であった。その反面、時間が足りない等の反省点も挙げられた。チューター側からは介入の方法が難しい等の意見が出された。